



モノに記された 情報を読み解き 歴史に埋もれた 人々の生活を 描き出す

11

文化財研究への誘い

—物質文化研究の視点から—

弘前大学人文学部文化財論講座

関根 達人 准教授

学問 図鑑

Illustrated book of
learning

このコーナーでは、私たちの社会や生活に身近な研究テーマを分かりやすく紹介する。第一線で活躍されている研究者の研究内容を中心に、学問の仕組みや今後の可能性などについて、インタビューする。

文化財が何を指すのか、明確に答えられる人は少ないでしょう。特に日本における文化財の概念は、美術工芸品から建築物、動植物、景観、祭事、信仰など非常に広範囲にわたります。そのため、文化財の研究では、そうした幅広い文化財をどう捉え、どのような価値を見出していくのか、それらを生み出した人間の生活や歴史をどう読み解いていくのか、保護や保全についてなど、幅広い研究テーマとアプローチが可能です。今回は、モノを通して人間の歴史を考察する物質文化研究の視点からの文化財研究を紹介します。

自然の風景や動植物から年中行事まで 極めて幅広い日本の「文化財」

文化財は、人類の歴史の中で生まれ、育まれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な人類の財産だとされています。日本における文化財保護法では、文化財を「有形文化財」「無形文化財」「民俗文化財」「記念物」「文化的景観」「伝統的建造物群」の6種類に分類しています。つまり、浮世絵などの美術品から街並み、ニホンカモシカ、芸能まですべて文化財なのです。これらの文化財の中で価値の高いものは、国や自治体などが指定・選定・登録し、重点的な保護が行われていますし、文化財の保存・修復に必要な「文化財の保存技術」や、土地に埋蔵されている「埋蔵文化財」も保護の対象になっています。

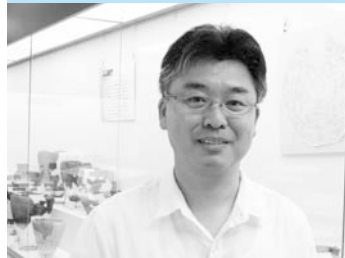
このように文化財の範囲は非常に広いため、文化財全体を研究対象にするような学問領域はありません。土偶

や石器の研究と、貴重な動植物の保護の研究、古文書の修復技術の研究では、アプローチの方法も研究手法もまったく異なりますから、文化財の研究は、研究対象ごとにそれぞれ個別に行われているのです。

私は、文化財の中でも、有形文化財、すなわちモノを対象に研究を行っています。歴史的史料、考古学的史料はもちろん、有形のモノであれば何でも研究対象です。文化財として保護されないようなモノも研究しますので、物質文化研究といった方がいいかもしれません。文化財を含めたモノを通して、そのモノから見えてくる人間の生活や歴史をひも解いていくのです。

例えば、コカ・コーラのビンを考えてみましょう。縄文土器は編年研究を積み重ねた結果、その形状によって、おおよその製作年代がわかっています。コカ・コーラのビンの形も同様です。何度か型式が変わっているため、ビンの形を時間軸の中に位置付けることができます。すると、日本にそのビンが入ってきたのはいつか、韓国ではいつかといったように、ビンの流通に関する時間的変化や地域的な広がりを調べることができず。コカ・コーラをアメリカ文化の象徴の1つと見なせ

PROFILE



関根達人 (せきね・たつひと)

弘前大学人文学部文化財論講座准教授
1965年生まれ。1989年東北大学文学部卒。1992年東北大学大学院文学研究科博士後期3年課程中退。東北大学文学部助手、東北大学埋蔵文化財調査研究センター調査研究員を経て、2001年弘前大学人文学部助教授。2008年より弘前大学大学院地域社会研究科准教授(兼任)および同大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター長(兼任)。考古学をベースにした物質文化研究を主なフィールドとし、アイヌの物質文化や近世日本海貿易に関する考古学的研究、亀ヶ岡文化、近世墓制、飢饉供養塔などに関する研究などが、近年の研究テーマ。「あもり歴史モノ語り」(2008年、無明舎出版)、「動物と中世」(共著、2009年、高志書院)など著作も多い。



ば、コカ・コーラのピンの型式変化を追うことで、アメリカ文化がアジアに流入し、伝播していった状況を明らかにすることができるのです。

！ウソをつかないモノを通して生活にアプローチする物質文化研究

物質文化研究は、広義には歴史研究の中に含まれます。歴史を研究する際には、文字の記録が残っている時代であれば、古文書などを手がかりにした歴史学が力を発揮しますし、文字が生まれる前の先史時代の歴史を調べようと思えば、残された遺物や遺跡などの具体的なモノから社会や文化を分析する考古学の独壇場となります。モノの研究から見えてくる歴史的事実は、文献が存在する時代であっても、文献から見えてくる事実とは異なる側面を明らかにしてくれることも多く、歴史研究においては極めて有効な手段です。物質文化研究は、考古学をベースに、先史時代から昨日までの、この世に現存しているあらゆるモノを研究対象にしているのです。

圧倒的な情報量がある文献に比べて、モノから得られる情報量はあまりにも乏しいのが実情です。それなのに、なぜモノの研究が有効なのでしょう。

第一に、文字で書かれた情報は必ずしも正しいものではありません。意図的に事実を曲げたものや、書き記すときに間違ってしまったものもあるでしょう。これに対して、モノはウソをつきません。物質文化研究では、量は少なくとも質の高い、正確な情報を入手できるのです。

第二に、古文書等に記されている情報は、ほとんどは勝者、権力者、為政者の側の情報です。圧倒的多数の庶民の側の情報が、それらの文献からは欠落しているのです。ところがモノは、身分や階級に関係なく、それぞれの生活形態に応じて等しく使われています。庶民が残したモノから庶民の生活が浮かび上がってくるのです。

このウソのない情報、庶民の生活がわかる情報という観点から、私が行った研究をいくつか紹介しましょう。

！江戸時代の喫煙率は5割！男女が等しく喫煙していた

タバコは、日本の戦国時代後半にスペインやポルトガルなどからもたらされました。現在でこそ、喫煙は健康を大きく阻害するものとして見られています、それが明らかになったのは近代以降であり、タバコが入ってきた当初は、むしろ薬として用いられていたほどです。

江戸時代にはタバコの作付面積が拡大し、米の栽培を圧迫するまでになっていましたから、喫煙率が高かったことは間違いありませんが、そのことは文献としては残っていません。タバコが体に悪いものだとして認識されていれば、記

録に残ったかもしれませんが、ごく普通の嗜好品だったためにわざわざ記録に残すことはしなかったのです。

そこで登場するのが、モノを通じた研究です。紙巻きタバコが登場するのは明治時代の後半ですから、江戸時代は煙管（キセル）を使ってタバコを吸っていました。人が亡くなると、生前好きだったものを一緒に埋葬することはよくあります。紙巻きタバコでは腐ってしましますが、両端に金属を使った煙管は、錆びてボロボロになることはあっても完全になくなってしまことはありません。そのため、煙管が副葬されている率から喫煙率が推定できるのではないかと考えたのです。

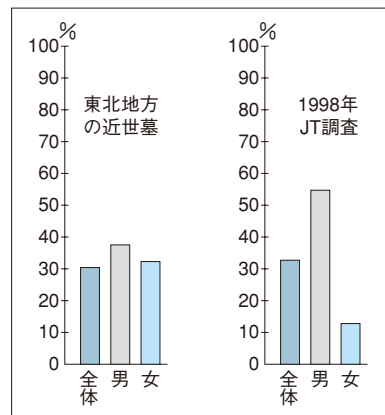
東北地方で調査発掘された約1,200墓の副葬品を調べたところ、全体の約3割の墓から煙管が出土しました< **グラフ1** >。しかも、これは最低喫煙率です。喫煙していても煙管を副葬しない場合がありますが、非喫煙者に煙管を副葬することはありえません。煙管の副葬率より当時の喫煙率は高いと推測されますので、本来の喫煙率は5割を超えるのではないかと予想しています。

興味深いのは、男女の喫煙率に差がないことです。煙管をくわえている浮世絵をよく目にしますが、あれは特別な女性ではなく、一般の女性も半数程度はタバコを吸っていたわけです。日常的に煙管でタバコを吸う女性のイメージは、少なくとも弱々しいものではありません。モノを研究することで、その時代の人間像までがおぼろげながら見えてくるのです。

！墓石を丹念に調べて分かった藩の公式記録のウソ

江戸時代には飢饉が何度も起こり、大きな人口の変化

<グラフ1>
煙管の副葬率と現代日本人の喫煙率



(出典「あおり歴史モノ語り」関根達人著、無明舎出版、44頁)

がありましたが、現在の国勢調査のような人口統計はありませんでした。人口統計以前の人口を調べる歴史人口学では、江戸時代の人口を把握するには、寺の宗門人別帳^(*)を使うのが一般的です。ところが、宗門人別帳は完全な形で記録が残っているものは少ないのです。また飢饉で餓死者が出れば、藩の公式の記録には残りますが、餓死者がでるのは藩政が悪いということで幕府からおとがめがあったため、100%信用することはできません。

例えば、東北地方に大きな被害をもたらした宝暦の飢饉(1753～1757年)の際、弘前藩はちょうど宝暦の改革中だったため、公式の記録では、改革が功を奏し、飢饉はあったが餓死者はいなかったとされています。しかし、ある寺の過去帳を調べるとかなりの人が亡くなっているのです。過去帳はお寺の帳簿に当たるもので、ウソを記載する必要も理由もないため、餓死者が出たことが推測されるわけです。

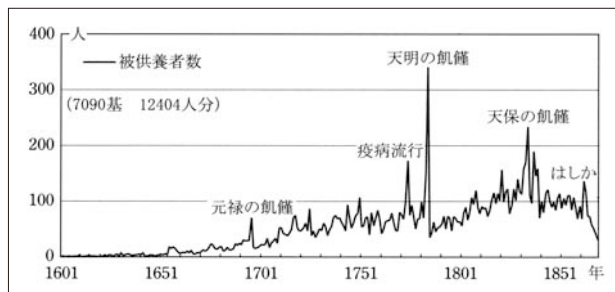
しかし、過去帳はプライバシーに関わる情報も含まれており、簡単に入手できる資料ではありません。そこで文献に頼らない方法として、墓に注目しました。18世紀後半からは庶民でも墓を建てるのが可能になり、飢饉の年に墓を建てられなくても、後年になって供養の一環として建てられていました。墓石に刻まれた没年を調査することで、死者数の増減が分かるのではないかと考えたからです。津軽地方の約7,000墓について調べたところ、飢饉の年にかなりの死者数を確認しました<グラフ2>。

石高ゼロの松前藩には飢饉がなく 米どころで酷い飢饉の実態

同じ手法を使って、被害の大きかった天明の大飢饉(1782～1787年)の際の、松前藩の状況を調べました。松前藩は石高ゼロで、米がとれない藩でした。そのため、アイヌなどの少数民族との交易を通して、北の産品を流通させることで財政が成り立っていました。しかし、幕末に函館が開港し、札幌に開拓地が作られると、過疎が進みました。そのため、江戸時代の墓がそのままの形で残っています<写真3>。

約6,000墓について調べた結果、松前藩には飢饉による被害がないことがわかりました。なぜなら、米を作れないため、米を買っている社会だったからです。もちろん米価が上昇すると生活は苦しいのですが、死者が出るような被害はなかったのです。一方、米どころの弘前藩では大きな被害が出ています。米は最大の商品であり、米に100%依存した社会だったために、不作になると決定的な打撃を

<グラフ2>津軽地方の墓石からみた死者数の推移



(出典「あおり歴史モノ語り」関根達人著、無明舎出版、71頁)

受けたのです。飢饉で大きな被害を受けるのは米の生産地であって、消費地ではないという事実、さらには単一の商品に依存する社会の危機管理の在り方についての示唆などが、墓

<写真3>北海道松前町における江戸時代の墓石の調査風景



(写真提供：関根達人先生)

石の没年を調べることで見えてきたのです。

今後は、この松前藩の墓の研究の延長として、日本の北方進出を研究する予定です。アイヌを含めてサハリンに住む人々は、生活の大部分を日本に依存していました。時代によって異なりますが、陶磁器や鍋、煙管などは日本のものを使っています。こうしたモノの流通を調べることで、経済的・政治的な理由も含めて、北方進出の状況について詳細に分析したいと思っています。

身の回りのありふれたモノも研究対象 すぐに第一人者になれる点も魅力

最後に、物質文化研究の面白さについて触れておきましょう。前述したように、モノはウソをつきません。しかし、決して雄弁ではありませんから、どんな視点からどんな情報を引き出すかが重要になります。手元にあるペン1本を眺めて、そこからどれだけの情報を引き出せるかということです。モノの形状はもちろん、材料その他の成分、流通経路など、発想が豊かであれば、いろいろな視点から研究することが可能です。

しかも、貴重な文化財だけでなく、身の回りのありふれたモノを研究対象にできます。人が見向きもしないモノを取り上げて研究を進めることができれば、その分野では第一人者になれる。著名な研究者と学部4年生が、同じ土俵で議論ができるのは、大きな魅力の1つといえるでしょう。

(*)宗門人別帳…江戸時代に作成されていた、現在の戸籍台帳のような文献。一家族ごとに家主や家族構成、名前、年齢等が記載されている。